地震に強い古民家へ

豊川の築80年 耐震診断実施 専門家が改修の道筋探る

愛知県古民家再生協会（戸田由信理事長）は18日、豊川市千両町にある築80年の古民家で、耐震診断を実施した。伝統的な建築構法を用いて、地震に強い古民家として再生することを目的に、改修への道筋を探った。

耐震診断が行われた豊川市の古民家

早稲田大理工学部元教授で、一般社団法人伝統構法耐震評価機構理事の毎熊輝記さん（73）が診断を行った。梁（はり）と柱でつくる伝統構法の耐震の方法論は、現行の耐震基準とは大きく異なり、壁で建物を固めるのではなく、揺れに対してバネのように戻す力を発揮し、建物全体で揺れを吸収する。

毎熊さんは、壁の強度で建物を固めて耐震性を上げるという現行の耐震基準だけでは不十分だとして「早稲田式動的耐震診断」を開発した。建物の揺れ方の特性をデータ化し、構造上の問題点を分析する。

診断は、地震計を使って、地盤と建物の振動を計ることから始める。地盤は人が感じないレベルの微小な揺れが常にあり、建物もそれを受けて振動している。4分間の計測を3回実施して平均値を出し、震動の特性をコンピューターで解析する。

この古民家は、50歳代の夫妻が母親から相続し、終（つい）の棲家（すみか）として暮らせるよう改修を決めた。40坪ほどの2階建て家屋で、太い梁や大黒柱が歴史を感じさせる。

同機構の園田正文代表は「東日本大震災では、意外にも古い建物が残ったという。しっかりした木材を使った梁や柱は年とともに強度を増し、100年はもつ。これを生かさない手はない」と話す。

こうした流れを受けて国交省でも、伝統構法を見直す動きが進んでいる。戸田理事長は「古民家は日本の原風景の1つ。1軒でも多く残したい」と力を込める。

（多田羅有美）

耐震診断を行う毎熊輝記元早大教授

地域連携で減災図ろう

来月12日 表浜ネットがシンポ

豊橋市のNPO法人表浜ネットワーク（田中雄二代表）は5月12日午後1時から、渥美半島津波防災シンポジウム「前向きに地域の連携で減災をめざす！」を、田原市の赤羽根文化会館大会議室で開く。東日本大震災の教訓を踏まえ、渥美半島の自然を生かし、普段から取り組むことができて災害時に機能する減災について考える。

シンポジウムでは、土木研究センターなぎさ総合研究室長の宇多高明氏が東